

二〇二二年一〇月一五日

明日香路や指を伸ばせば赤とんぼ  
挟み竿届かぬ先に柿熟るる  
秋耕や島に畑はこの二反  
黄落の庭に手術の終はる待つ  
野仏も御目上げませ翳雲

二〇二二年一〇月一四日

パトカーの見張る踏切そぞろ寒  
秋蝶の風にあづける翅薄し  
芋掘りて嬉々たる子らの顔に土  
庭木に干す軍手軍足秋日和

二〇二二年一〇月一三日

星座表手にする秋の夜警かな  
広がりし苧田の空に昼の月  
合掌の軒を余さず柿簾  
秋思やな愚痴言ひ合へる人もなく  
送電線 撓む蒼空 秋の晴  
乳飲み子のごとく大樹のけらつつき

二〇二二年一〇月一二日

湖岸ゆく秋夕照の比良比叡  
秋桜や風と駆けたるお下げ髪  
一枚を刈れば稲田の風替る  
貝殻にのこる足跡秋の浜  
秋天へクレーン首振る開発地

二〇二二年一〇月二一日

退院の風呂に鼻歌虫の夜  
山峡の右近の郷に秋惜しむ  
渡船から影降りたちて秋夕焼  
一人酒庭の幸なる秋茗荷  
丹精の芙蓉酔はせて和尚留守

二〇二二年一〇月一〇日

廃線路あり月明の切通し  
丘の秋発電風車機嫌よし  
秋晴れて蛇行す川の青さかな  
ななかまど燃へて夕日を弾きけり  
海峡の渦を貫く月の道  
どんぐりの兵隊並ぶ砂の城  
大原女に道問ふ古都の菊日和

二〇二二年一〇月九日

店閉ずと張紙古りし寒露かな  
軋み着く終着駅やあきつ群る  
能登の塩ひとつかみふる栗強飯  
閑けさや秋の湖岸へ鮎の竿  
秋の蝶日差しの庭を舞ひつづけ

二〇二二年一〇月一七日

毎日句会みゆる選・二〇二二年一〇月一七日

やよい

明日香

千鶴

凡士

むべ

うつき

こすもす

もとこ

智恵子

うつき

たかを

小袖

凡士

はく子

董雨

あひる

凡士

なつき

たか子

こすもす

満天

うつき

素秀

素秀

邑

うつき

凡士

千鶴

あひる

凡士

素秀

なつき

智恵子

なつき

なつき

凡士

隆松

満天